

句集

紫苑



桜庭敏子

富士見書房



紫苑^{しおん}

平成三年十月二十日 発行

定価 二六〇〇円

(税込)

著者 桜庭敏子

発行者 中井茂雄

印刷者 菅生光男

製本者 宮田四郎

発行所 富士見書房

東京都千代田区富士見一ノ十二ノ十四
千一〇二 振替東京七十八六〇四四
営業部(〇三)三二六二一五三七五
電話 編集部(〇三)三二二二一五四二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替え致します。
ISBN4-8291-7197-9 C0092

序

川
崎
展
宏

この句集の上梓は、著者の夫君・桜庭幸雄氏のご遺志によるもの、と聞いている。

寄 鍋 の 湯 気 の 向 う に 人 居 ら ず

桜庭幸雄氏は、NHKを定年退職の後、日本放送出版協会、日本放送教育協会の役員を歴任されたが、最後の病床で「仰臥して見えるのは雲だけ」と「雲」春夏秋冬数十句を作られるという俳句熱心な方であった。生前、三冊の詩集と一冊の句集『悟浄』（昭和六三年 永田書房）を持たれた。『悟浄』以後にも数々の秀吟を残されている。左は、いずれも平成二年（三月二十七日 没）「貂」に発表された句である。

夏 燃 え て 雲 ま た 高 き こ こ ろ ざ し

幸 雄

松飾る夫婦の会話限りあり
春の雲雛を育てて居るならん
秒針は上りに重き春の昼
" " "

「湯気の向うに人居らず、湯気の向うに、居るべき人は居ないのであった。

秋天へ登る鳥獣戯画の寺

昭和五十九年八月下旬、京都で催した「紹のつどい」での作。いつものように夫妻で参加されたが、幸雄氏の詩集に、鳥獣戯画をふまえた『動物戯画』（昭和四八年 昭森社）があり、作者にとって、これは思いのこもった句であった。

高山寺。方形の石を踏んで石垣に添い、石段を登る頃には、心の澄んで来

るのを覚える。澄んで安らいでくる。明恵上人の人柄を思わせる寺のたたずまい。樹の股で瞑想に入った明恵。二度、夢に塔を見て、ついに九輪に登りつめ、十方世界を眺めたという明恵。

「秋天へ」の句は、作者が秋天へ登る思いで鳥獣戯画の寺へ登って行くのだらうが、鳥獣戯画の寺そのものが秋天へ登って行くともみることのできる。作者の思いが深い場合、作品が作者の意図を超えることがあるが、この句など、そうした数少ない例の一つに挙げ得る優れた作品であらう。

「あとがき」によれば、著者は晩学を恥じておられるようだが、俳句の正念場は、常に刻々の眼前に在るので、幸雄氏の励ましを胸に、益々の精進を期待したい。左に、句集から数句を抜かせていただく。

穴を出し蟻花屑へ掃かれけり
大みみず横切る道の薄暑かな
纜をとぎ葭切を遠ざかる

ゆらゆらと紫苑の丈や磨崖仏
竜天に登る球場の長いホース
かくばかり金魚の尾鰭ひろがれる
提灯の届きて盆の家となる
七草の暈をよぎる鳥の影

平成三年 立秋

句集紫苑 目次

序 川崎展宏……………一

I 昭和五十四年～六十年……………二

春……………一三

夏……………三五

秋……………五三

冬……………八九

Ⅱ 昭和六十一年～平成三年……………一九

春……………二一

夏……………一四九

秋……………一六一

冬……………一六七

あとがき……………二〇九

裴丁
熊谷
博人

句集

紫苑

桜庭敏子

I

昭和五十四年～六十年

春

三八句

